

ローマ字へボン式に

rōma ji shin hyou ki nichi
ローマ字新表記 22日から

政府は16日の閣議で、ローマ字の表記方法について、現在広く使われている「ヘボン式」を基本とするルールに変える内閣告示を22日に出すと決めた。現行の表記法を定めた1954年の内閣告示は廃止され、ローマ字表記の国の決まりが約70年ぶりに変わる。

現行の内閣告示は「し」を「si」と表す「訓令式」を用いると定め、**「shi」**のヘボン式が浸透しており、文化審議会が8月、ヘボン式を基本とするなど新たな表記ルールを文部科学相に答申していた。ヘボン式の採用により、「つ」は「tsu」、「じ」は「ji」、「しゃ」は「sha」、「じゃ」は「ja」になる。また、はねる音「撥音」の「ん」は「n」を用い「anman（あんまん）」などとし、つまる音「促音」は子音字を重ねて「teppan（鉄板）」などと表記する。長音で発音される語は横棒の符号「マクロン」を付けるか、母音字を並べる。

毎日新聞朝刊 2025年12月17日掲載(共同通信配信)

ローマ字へボン式に
文化審答申 70年ぶり改定へ

ローマ字の表記について、文化審議会は20日、従来の訓令式から英語の発音に即したヘボン式を基本とするルールに改めるよう、阿部俊子文部科学相に答申した。年内にも内閣告示される見込みで、1954年以來約70年ぶりの改定となる。訓令式でローマ字を教えた小学校の国語も、2026年度以降は順次ヘボン式に変更となる見通しだ。(6面に関連記事)

日本語の仮名遣いに対応するアルファベットの子音と母音を組み合わせた訓令式では「し」を「si」、「つ」を「tu」とする。一方、道路標識やパスポートの氏名表記では省令に基づき、英語の発音に即した「shi」「ru」などのヘボン式が使われることが多い。人名や地名もヘボン式が一般的だ。訓令式はキーボードのローマ字入力などで活用される以外ほとんど使われていない。

また、母音を伸ばす長音を表記する際、訓令式は「a」のように母音の上山形の符号を付けるが、これもヘボン式で「a」などと表す構形に統一する。ヘボン式は符号を用いない場合もあるが、例えば「大野」を「Ono」とすると「小野」と判別できないため、「Onono」と母音を並べて表記する方法も示された。

学校教育では、小学3年の国語でローマ字のつづり方を訓令式を基本に教えられる。一方、20年度に小学校で教科化した英語の授業ではヘボン式を習うため「児童の混乱を招く」という指摘もあった。文化庁は22年7月からローマ字表記の議論を本格化させ、24年5月に盛山正仁前文科相が文化審議会に諮問、ローマ字小委員会を設置して検討していた。【西本紗保】

毎日新聞朝刊 2025年8月21日掲載

余録

江戸末期に来日し、本初の近代的な和英辞典を編纂した米国の宣教師ヘボン氏は、ローマ字の表記方法を普及させたことも知られる。言やつりを英語風に書き表すもの「ヘボン式」という漢字やかな文字の習得が壁となる外国人との意思疎通に、ローマ字での表記は欠かせないものだった。そのローマ字の表記のあり方について政府は見直しに着手した。政府は1954年から、ヘボン式と異なる母音と子音を規則的に組み合わせる「訓令式」という方法を原則としている。複数の表記方法が社会に混在しているため、「できるだけ統一的な考え」を検討するところ。▲ボ式で「し」は「shi」、「ja」は「ja」、「cha」は「cha」、「tya」は「tya」になる。地名や人名など固有名称はヘボン式が使われることが多い。情報端末へのローマ字入力でもよく用いられている▲小学校で訓令式のローマ字を教えるも、英語の授業は、ボ式式の表記が出てくる。当の政府も、パスポートはヘボン式だ。「訓令式は十分に定着したと言えない」と新直に認める。約70年ぶりに見直しに乗り出した形である▲ヘボンは「これは何か」という日本語をまず覚えたい。医師として多くの人を診察しながら、食欲と言葉を吸収していった▲外国人観光客や労働者が増え、地名などをローマ字で記す必要は、いっそう増している。ふたつ、この方式の長所と短所を見極めて、がらりと変えていく。社会の変化も映し出すに違いない。ローマ字の未来。 (C) 2024. 10. 18

毎日新聞朝刊 2024年5月18日掲載

James Curtis Hepburn
 ジェームス・カーティス・ヘボン

1859年、開港間もない横浜に宣教師として来日。医療活動や「和英語林集成」の編纂、ヘボン式ローマ字の考案などを通じて日本の近代化に貢献。また、ヘボン塾を淵源とする明治学院(現在の明治学院大学)を創設して教育にも尽力。



『J.C.ヘボン肖像写真』(明治学院歴史資料館)を改変

英語話者にとって発音しやすい表記として

生まれたヘボン式ローマ字は、

日本語をアルファベットで

表記する方法として広く普及し、

日本と世界をつなぐ役割を果たしてきました。

国際化が進む現代においても、

その役割は変わりません。

	訓令式	ヘボン式		訓令式	ヘボン式
し	si	shi	ちゃ	tya	cha
じ	zi	ji	しゅ	syu	shu
ち	ti	chi	じゅ	zyu	ju
つ	tu	tsu	ちゅ	tyu	chu
ふ	hu	fu	しよ	syo	sho
しゃ	syā	sha	じよ	zyo	jo
じゃ	zya	ja	ちよ	tyo	cho

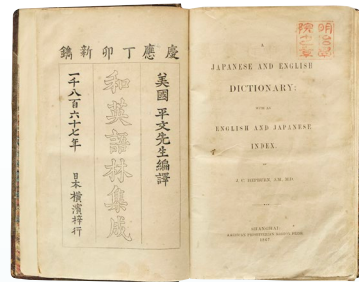
世の中でヘボン式の方が広く使われている実態を踏まえ、2025年12月に「ヘボン式」を基本とする内閣告示が出されました。これによってローマ字について国が定めた表記ルールが、約70年ぶりに改定されました。

ローマ字はヘボン式に

アルファベットを使って日本語を示す「ローマ字」には、母音と子音を規則的に組み合わせる「訓令式」と英語の発音に合わせた「ボ式」があります。日本では1954年、内閣告示で「一般に国語を書き表す場合は訓令式を用いる」と定め、「ヘボン式」は限定的に使うとしてきました。

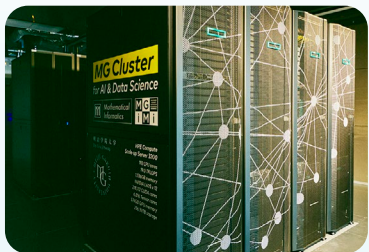
ヘボン博士が考案

「ヘボン式」を考案したのが、明治学院大学の創設者ジェームスカーティスヘボン博士です。ヘボン博士は宣教師の医師として江戸末期に来日し、施療所を開設すると、無償の医療事業に取り組みました。その傍ら、日本語を学びながら町ゆく人々に「コレハナデスカ」と何度も問いかけ、言葉を集めました。その成果として結実したのが日本初の和英辞典「和英語林集成」です。そこに使われた表記法が、後にヘボン式ローマ字として広く知られるようになりました。「ヘボン式」は単なる表記法ではありません。異なる言語や文化を持つ人々が互いを理解するための工夫であり、日本と世界の架け橋となったのです。



和英語林集成 初版

今も新たなイノベーションの場を目指して



文理融合の取り組み

明治学院大学情報科学融合領域センターでは、大学の情報科学分野と人文・社会科学分野が有機的に連携し先端的・先駆的な共同研究を推進しています。



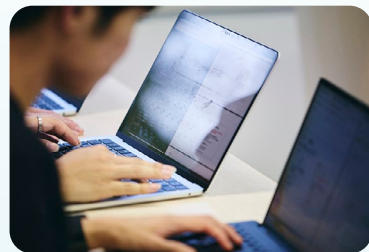
Road to HAKONE 2030

駅伝競技としての強化だけでなく、さまざまな困難に打ち克ち、他者を思いやることのできる人間力を養成し、社会に貢献できる人材を育成するとともに、関係者の明学愛の醸成と新たな価値の創造を目指しています。



海外協定校連携科目群

世界25か国への留学だけでなく、オンラインで海外協定大学の講義をリアルタイム受講し、現地学生と共に学ぶプログラム。国境を越えた対話を通じて国際的視野を育みます。



AI・データサイエンス教育プログラム

AI時代の新たな基礎知識を教授する、全学部生対象の教育プログラム。毎年2,000人を超える学生が履修し、AI・データサイエンスの基礎から実践的な課題解決までを3つのレベルで体系的に学んでいます。

真理を探究し、世界に貢献する



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

明治学院大学

白金キャンパス

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

横浜キャンパス

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518

大学ホームページ

<https://www.meijigakuin.ac.jp>

